

たどつ の むかし

Vol. 25 令和3年2月5日発行

きよせきふん しゅくち 巨石墳、「宿地古墳」

令和3年1月に町指定史跡「宿地古墳」の調査を行いました。

多度津町には指定史跡になっている古墳は5基あります。それは県指定史跡の「もりつちやま盛土山古墳」、町指定史跡の「くろふじやま黒藤山古墳（黒藤山4号墳）」、「みたらいやま御盥山古墳」、「むかいばら向井原古墳」、そして「宿地古墳」です。黒藤山古墳と御盥山古墳は古墳時代前期の前方後円墳、盛土山古墳は古墳時代中期の円墳、向井原古墳は古墳時代後期の円墳とされています。宿地古墳も向井原古墳と同じく、古墳時代後期の横穴式石室を持つ円墳であると思われるのですが。今回の調査によってその内容は大きく変わってきました。

まず宿地古墳の横穴式石室は非常に大きな石材を利用しています。中には2mほどの大きな石もあります。このような大きな石で造られた石室を持つ古墳を「巨石墳」といいます。県内で有名な巨石墳と言え、おおのはらこふんぐん観音寺市にある国指定史跡の「大野原古墳群」のわんかしづか椀貸塚・ひらつか平塚・かくづか角塚がありますが、宿地古墳はそれらの影響を受けて造られた古墳であるといえます。

そして石室の構造や採取された須恵器の時期から、宿地古墳が造られた時期は7世紀前半期、つまり飛鳥時代の大化の改新が行われた頃ではないかと考えられます。いわゆる「しゅうまつきこふん終末期古墳」と呼ばれるものです。そのため多度津町内では前述したような様々な古墳がありますが、宿地古墳は多度津町内において最終段階に造られた古墳ではないかということがわかってきました。



石室開口部



石室内の巨大な石材



宿地古墳正面から